佐伯市 総括会議 ハピカム ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」第13弾佐伯市編が6日、同市役所などで行われた。「1次産業」「観光」「産創交流」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、各分科会で出された「ミライキーワード」を中心に議論をさらに深めた。その中では、9市町村が合併し九州一の面積を持つ佐伯市内でどのように連携の輪を広げていくか。その輪を生かして東九州道の開通後、どのように市の活性化を図っていくかが大きなテーマとなった。山も海も街もある広い佐伯市は、広いからこそこれまで互いに知らなかった素材がたくさんある。海は海、山は山ではなく、海と山と街を周遊する取り組みを模索すること、その取り組みで外部のファンを増やすとともに、市内の人に「佐伯を愛する」ファンを増やす重要性も指摘された。参加者はこの日の出会いをきっかけとして新しいつながりを生み、新しい佐伯の魅力を創造していくことを誓い合った。

■ウェブ　http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン　http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／佐伯市　佐伯商工会議所　佐伯市番匠商工会　佐伯市あまべ商工会
協賛／国立大学法人 大分大学　㈱大分銀行　㈱ドコモCS九州大分支店　日本たばこ産業㈱熊本支店　大分県マリンカルチャーセンター

「おりたくなる」佐伯に

「1次産業」分科会まとめ

キーワードは「売り込み力」。佐伯は素材に恵まれているが、PRができていない。林業は大規模・機械化が進み、数量を集約することで価格競争力を持ち全国市場に販路を拡大している。海産物は新しい食べ方の紹介や学校給食への導入、かぼすドラメやかぼすプリなどブランド品をつくることで盛り上げようとしている。農業は戦略的に売れる産品を見極めてブランド開発や販路拡大、地元レストランとの連携を行っている。就業者・収入とも減少傾向にあり、厳しい。産品の魅力を生かしきれているのかを考え、生産者の立場で工夫ができないかを話した。厳しい状況を変えるには、生産者自らが魅力をつくり出すことが必要ではないか、加工するなどあと一歩踏み込むことによって新しい市場を切り開けるのではないかと指摘された。生産者が前に出て売り込むことで佐伯ブランドをつくり、それを消費者に浸透させることで佐伯の観光にもつながっていくのではないか。素材の良さに頼りきるのではなく、生産者も魅力づくりにあと一歩努力して売り込んでいこうという意見からこのキーワードを導き出した。

“ミライキーワード”
売り込み力

「観光・分科会まとめ

キーワードは「とことん佐伯愛～街・浦・里・人～」。「佐伯には何もない」と言う人が多いが「でも佐伯は好き」と意見も多いので、まず地元愛をもっとアピールしていこうと指摘された。佐伯には街・浦・里がある。互いに深く知り合うことによってアピールできるのではないか。高速道開通で人をただ通過させないためにどうすればいいかも話し合った。約67%の無料区間があり、ただ通過させるのはもったいない。お金が掛からないなら降りてもらって、面白いものを見せ合うけど、さらに人が集まるのでは。街・浦・里の人が交流の場をつくり、それを発展させ、海で地引網を体験した後に山でシイタケ狩りをするなど周遊してもらうツーリズムこそいちばん必要ではないか。そのためには人同士が自由に話し合い連携すべき。「あの人に会いたい！」旅行の目的になれる人をつくっていけば魅力も増す。生産者の顔を見ると食べ物はよりおいしくなるし、作った人を知ればその商品を紹介したくなる。人を生かして口コミを広げていけば面白い佐伯が発信できるのではないかとの議論になった。

“ミライキーワード”
とことん佐伯愛～街・浦・里・人～

「産創交流」分科会まとめ

ミライキーワードは「ファンをつなぐ」。ファンとは、市内の人と市外の人両方を含んでいる。テレビやインターネットで佐伯が紹介された時に「こんな思い出がある。もう一回行ってみようか」と思ってもらえるか、佐伯の手助けをしたいと思ってもらえるのが市外のファン。「こんないいものがあるよ」と自信を持って言えるのが市内のファン。分科会のメンバーは地元の産品を生かし、地元の特徴を前面に出す商品をつくりたいという思いが強く、既に佐伯のファンと言える。今後は広い佐伯市内にいる自分たちのようなファンをどう出会いつながっていくかが課題となる。

ソーシャルメディアか、それとも会合を持つのか、ファンをつなぐことを仕事にする人が巡回していくのか、方法についても話し合った。ファンがつながることを同時に、今はファンではない人をファンにしていく動きも必要ではないかと指摘された。仲間が増えることは目標に向かって頑張る人が増えるということ。市外のファンもつないでいくために、とにかくいろんなことを「やってみよう」という意見で一致した。

“ミライキーワード”
ファンをつなぐ

「佐伯」の意識はどこか

丸山　佐伯は豊富な海山の幸に恵まれた素晴らしい環境にあるとあらためて感じました。山浦先生は分科会の議論を聞いてみてどんな印象を持ちましたか。

山浦　1次産業分科会は分野が違うメンバーで新しい動きはなかなか難しいのかなと思っていましたが、ペレットボイラーというアイデアが出ていました。余った木材を農業のハウスのエネルギーに使う連携があると。一見違う分野でも連携の今り方がある。キーワードは「売り込み力」で、自分たちでつくった物の良さをもっと出していこうということだったが、餅は餅屋という話もあった。加工や販売まで全部自分たちでやっていくのは難しいので、市内の人と連携していければどういう話でした。観光分科会は、高速道開通を控えて、観光の意味とは何かが話されていた。浦美と農業は電卓の桁や文化が違うのですぐ連携するのは難しいが、観光という軸では何か一緒にできるのではないかと。観光分科会の方はその役割も担っていくのではないかと思います。産創交流分科会では、地元の材料を使っていなければ地消とは言いにくいし、地元の人に飲んでもらいたいという話があった。材料を集めることを地元で飲んでもらうことが課題だと。材料の確保では、種ショウガをみんなに配って作ってもらう取り組みを考えている。どうやって市民を巻き込んでいくかという話が印象に残りました。キーワードの分科会でどのような議論だったのかの紹介と、10年になる合併についてどのように捉えているかを話していただきたいと思います。

御手洗　キーワードが「売り込み力」ですが、佐伯は素材はいいのにPRが足りないのではというのが議論の中心になりました。素材はいいけど人に物を訴求する場合はつくった人の顔に目がいく。知っている人の物なら手に取ってもらうことがあるんで、私は顔をお客さんに見せるように心掛けています。レストランのシェフと提携した取り組みをしていて、私が白いシャツを着てエプロンを着けて接客するんです。インパクトが強いのか顔を覚えてくれる。覚えてくれた人が地元で買ってくれている。そういう地道な取り組みが必要なんじゃないかなと。お客さんにどんどん顔を出していくことが有効なのでは、という理由でこのキーワードになりました。合併については特に持論などありません。

松久　キーワードは「とことん佐伯愛」ですが、みんなとことん佐伯が好きです。広い山があり海があり川があり、どこをとっても佐伯。とことん佐伯愛を買っていこうと。観光地としての佐伯を考えると大きな観光施設はない。でも「どこにいけばいい」と聞かれたら、「佐伯はいい所。来てくれたら絶対に満足できますよ」と、好きな佐伯をアピールして来ていただこうということから、このキーワードになりました。食べ物も何でもおいしい。来てくれたらこんな食べ方もあると教えてくれる人もいる。街・浦・里・人とキーワードに付けていますが、合併した広い区域が佐伯と考えています。当初は「佐伯じゃない土浦江だよ」という意識もあったが、そんなことを言っている場合じゃない。大好きな佐伯をみんなで盛り上げていこうと。観光施設じゃなくても、シイタケを作るおじいちゃんに会えたり、収穫体験をしてみたりなど物を見るだけじゃない観光もあって、自分たちが佐伯を愛してそれを伝えるという、人と人との触れ合いの観光を考えています。浦江インターチェンジ（IC）で高速を降りた人は、周道した後佐伯ICで乗ってもらいたい。逆に佐伯ICで降りた人は浦江ICから乗ってもらいたいと考えています。

橋本　キーワードが「ファンをつなぐ」になりました。分科会メンバーは商品をつくっている人たちなので、商品のファンになってもらいたいというのがあります。ですが、1次産業の方が作った産品から商品をつくっていますので、地域が盛り上がっていかないと自分たちの商売が成り立っていかないところがあって。ぶんご銘醸さんは米や芋を自社で作っています。農家から仕入れる方が楽だけど農家が高齢化で減ってきている。自分もこのこしょうゆを作っていますが、漁師さんが減っている状況。まず素材を作る1次産業の方が元気じゃないと難しいなというところを感じています。元気になるためには人口が増えていかないと後継者ができない。来てもらい住んでもらえるようなファンと、何か手助けをしてもらえるようなファンを増やすのと、地元を愛し、子どもが住み続けたいと思うような環境づくりが大事だと思います。合併で広くなって行政も一つの所に力を入れにくくなっているので、計画の途中で終わってしまったりとかあるように意見も出ました。

産創交流／若手リーダー
Chiharu Hashimoto
橋本千春 さん
佐伯市蒲江在住。38歳。Gran Primavera代表。結婚を機に蒲江のたこ漁へ。蒲江産のウニを使ったウニしょうゆを開発し、販売している。

PRが足りないのでは

丸山　まず各分科会の代表の方に、それぞれ

自分で栽培に取り組む

丸山　1次産業が元気でなければという話が

1次産業／若手リーダー
Daigo Mitarai
御手洗大悟 さん
佐伯市在住。35歳。椎茸栽培業。愛知県の妻石生産者の下で研修。2009年に農場を継ぎ、ミディトマトの生産に取り組む。大型の無菌施設建設を目標。

「観光・分科会まとめ

キーワードは「とことん佐伯愛～街・浦・里・人～」。「佐伯には何もない」と言う人が多いが「でも佐伯は好き」と意見も多いので、まず地元愛をもっとアピールしていこうと指摘された。佐伯には街・浦・里がある。互いに深く知り合うことによってアピールできるのではないか。高速道開通で人をただ通過させないためにどうすればいいかも話し合った。約67%の無料区間があり、ただ通過させるのはもったいない。お金が掛からないなら降りてもらって、面白いものを見せ合うけど、さらに人が集まるのでは。街・浦・里の人が交流の場をつくり、それを発展させ、海で地引網を体験した後に山でシイタケ狩りをするなど周遊してもらうツーリズムこそいちばん必要ではないか。そのためには人同士が自由に話し合い連携すべき。「あの人に会いたい！」旅行の目的になれる人をつくっていけば魅力も増す。生産者の顔を見ると食べ物はよりおいしくなるし、作った人を知ればその商品を紹介したくなる。人を生かして口コミを広げていけば面白い佐伯が発信できるのではないかとの議論になった。

“ミライキーワード”
とことん佐伯愛～街・浦・里・人～

「産創交流」分科会まとめ

ミライキーワードは「ファンをつなぐ」。ファンとは、市内の人と市外の人両方を含んでいる。テレビやインターネットで佐伯が紹介された時に「こんな思い出がある。もう一回行ってみようか」と思ってもらえるか、佐伯の手助けをしたいと思ってもらえるのが市外のファン。「こんないいものがあるよ」と自信を持って言えるのが市内のファン。分科会のメンバーは地元の産品を生かし、地元の特徴を前面に出す商品をつくりたいという思いが強く、既に佐伯のファンと言える。今後は広い佐伯市内にいる自分たちのようなファンをどう出会いつながっていくかが課題となる。

ソーシャルメディアか、それとも会合を持つのか、ファンをつなぐことを仕事にする人が巡回していくのか、方法についても話し合った。ファンがつながることを同時に、今はファンではない人をファンにしていく動きも必要ではないかと指摘された。仲間が増えることは目標に向かって頑張る人が増えるということ。市外のファンもつないでいくために、とにかくいろんなことを「やってみよう」という意見で一致した。

“ミライキーワード”
ファンをつなぐ

九州最広だからチャンス最大

う連携ができたらなと思ってます。

つなぎ合わせ相乗効果

丸山　せっかく作るので全て使いたいのが生産者の思いでしょう。加工の連携について橋本さんはどうそえますか。

橋本　私は1次産業もかじってますが、設備投資も必要になり時間も手間も掛かるので6次産業や2次産業の人間がするのはすごく難しいと思ってます。さっきのOEMと言っていたように、加工会社と生産者をつなげるような役割ができたらいいなと。自分も委託してウニ醤油（しょうゆ）を作っていて、1次産業にはまっていたら商品化できなかった。つなぎ合わせてくれる人がいればいいなと思います。誰かが生産者と加工業者に話を持ち掛けることで相乗効果があればいいなと感じます。

丸山　観光との連携を考えて、こういうものがあればいいなと。とかありますか。

松久　蒲江では見ることのない観光じゃなく、生産者がふにゃふにゃ感を教えてもらい、ウニ丼を食べた後に、その生産者から、なぜ蒲江ではいしいウニが育つのかなどウニについてのお話を聞くイベントをしています。踏み込んで地域や人を知ることが観光につながり喜んでもらえる。蒲江はブルーツーリズムに力を入れていて、ブリの養殖所見学などもやっています。1次産業は観光の大きな資源になっていると感じます。佐伯には山もあるので、みそ造りやアユのうえんがけ体験などを1次産業の人が教えてくれたら、観光サイドからするとありがたい素材となります。自分たちが知らない生産者と今日知り合えたので今後につなげていきたいです。

暮らす人の幸せが大切

丸山　地元の素材が非常にいいと。そこを使って生産者から話を聞くなど広がりを持たせたらという話は興味深いですね。1次産業分科会アドバイザーの土居さんは、佐伯のポテンシャルを外部から見たときにどう評価されていますか。自己満足なのか本当に全国的に注目されるものなのか、そしてその素材を生かした観光のアドバイスを観光分科会アドバイザーの阿部さんにいただきたいと思います。

土居　一言で言えば良いです。ただそれが伝わっていないというのは大いにある。「こんないい物があったん！」では自己満足でしかない。どんだけ伝わっているかという部分をPRして伝えていけばいいんじゃないかと。それはわれわれの仕事でもあって、われわれが知らない知識、生産者だけしか知らないものもある。そういう情報を発信してもらいたいです。大分の魚は福岡市場で、例えば同じアジにしても他県より若干高くなる。高くなると自体評価が高いっていうことです。その大分の中でも佐伯の漁師さんの魚の取り扱いはいいです。買い付けでも県南の方に自然に足が運みます。

観光／アドバイザー
Takashi Abe
阿部貴司 さん
大分市出身。45歳。JTB九州大分支店営業課長。1992年に入社。産業支店を経て2011年から現職。10年後も地元大分の役に立つ仕事をしていたい。

阿部　分科会のキーワード「とことん佐伯愛」は事前に私が思っていたものになりました。高速の開通で通過点になるんじゃないかという不安を語っていましたが、九州新幹線ができる時に同様に熊本が通過点になるのではという話がありました。その時、くまもんの生みの親としても有名な小山薫堂さんが「まずは熊本県に住んでいる人が、暮らしていることを幸せに感じることの方が大切だ」というキャンペーンをしました。そういう熊本の気質をつづれば、幸福度世界一のブータンのように呼ばずとも誰もが行きたい土地になるという考えと。長いスパンで見たときに地元の方が地元を大好きになることが最終的に人を呼ぶことになるのではないでしょうか。地産地消や内需をがっちりやることで、外から見てもいいと思ってもらえる。息の長い取り組みですが、それが観光で人を呼ぶことになると思いますので、今やっていることが非常に大事。まず佐伯の中で発信して、佐伯の中でいいものを磨き上げていただきたいと思いました。

ポップで漁師料理紹介

丸山　食材としてこういうのがあれば外からお客さんを呼べるのにというのはありますか。

土居　例えば山路さん（誠治・1次産業分科会）が捕った魚に、「わしが捕ったんじゃ」みたいな写真を載せて「家ではこげな食べ方しよるんや」とか漁師料理のポップを付ければ買います。そういうことは簡単にできると思うんですね。東京に出荷するには味はよくまちがいないと問題があるみたいですが、そういう部分をまとめてやってくれる人がいるので、それを教えてあげる人や取りまとめてあげる人が必要なのかなと感じましたね。

丸山　やはり人が重要なキーワードになってきた。今までの議論で山浦先生はどう感じましたか。

山浦　人をつなぐのが重要というのは、皆さんが言う通りだと思います。話をうかがっていると、合併した佐伯という単位で活動をすることに違和感がないのかなと。橋本さんが分科会で「自分たちがいくら蒲江や字目と言っても、蒲江に来るお客さんは佐伯に来たと思っていて蒲江に来たと思っていない」と言っていました。地域でまだ違った価値観があってしょうがない。観光客と接する観光業の方から変わり始めているのかなと感じます。どうお客を呼んでくるかですが、人を前面に出すとか、自分たちの暮らしを大事にするという話は本当にその通りです。付け加えるとすれば、ものはいっぱいあってPRをすることも大事ですが、それを育てさんの生活に取り入れて生活の一部になる。もっと言えば地域の文化になるというのがこれからの観光のポイントなんだろうと思います。

隅の北浦町と連携して

観光／若手リーダー
Koki Matsuhisa
松久浩紀 さん
佐伯市蒲江出身。47歳。現地芸能人ビエール楽。マリンカルチャーセンター営業企画課勤務。伊勢えび親光大使。漁師料理研究家などで活躍。

丸山　松久さん、山浦先生が指摘した「いいものを生活の一部に取り入れる」という話を聞いて印象に残りました。

松久　1997年に地元の漁師さんとヤッチャンニーズというまちおこしグループをつくりました。漁師さんも水揚げを蒲江の市場にするより佐伯の市場の方がもちろん高い。だから早く通りが良くなってほしいと。そんなことも含めいろんなことを考えて高速開通前に地域で何ができないかを話してきました。地域の食材はたくさんある。何か一つに絞ってPRしようと伊勢エビを取り上げて始めたのが伊勢えび祭りです。蒲江だけでは盛り見向いてもくれないということで、お隣の北浦町と県境を越えた連携をしようと。高速開通までに祭りを大きくして開通したらたくさんの方に来ていただこうと。今年で11年目で、ある程度の認知度が出てきています。これは一例ですが、たくさんの食材の中から伊勢エビに絞り、地域を絞り、ターゲットを絞ったのが東九州伊勢えび街道・伊勢えび祭り。高速道開通までに何ができるのかを地域と一緒に考え、頑張ってきたつもりなので、やってきたことが正しかったのかが実際に開通した後のお客さんの増減で分かる。不安もあるし楽しみにもしています。来年の今頃伊勢えび祭りの客がどれくらい変化したかの結果が出ます。今年は、ばたくさんの方に来ていただきたいと思っています。

市内の移動も早くなる

丸山　海の食観光として伊勢えび祭りの取り組みを紹介してもらいました。では山の観光はどうでしょう。海との連携うまくの高橋さん（美和・観光分科会）お願いします。

高橋　山は本当に地味で、地味な雪人子寿（ずし）が生まれておりまして、雪人子寿しを作るという体験も用意しています。その素材であるシイタケを収穫する体験もあるので、全部つっくめて海と山の交流をしげたい。今、宇目や米良から蒲江に行くと時間を超えます。広いんですよ佐伯は。でも高速がつながったら約半分の時間で移動が可能になりますから、一日周遊体験として海のアワビを楽しんで、山のアワビと言われるシイタケを堪能できたら、山もあり海もありの広がりある佐伯観光になるんじゃないでしょうか。私たちは雪人子寿しがシイタケ生産者の希望の星になれるように頑張っています。食の良さを伝えて、子どもたちが自慢できる佐伯市であろうとすることが大切だと思っています。

田舎オールスターズで

総合コーディネーター
Hiroki Maruyama
丸山博基
1991年入社。販売部、整理部を経て整理部長。47歳。ふるさと佐伯は海山の幸に恵まれ「味力」も広まる九州一、高速道を開通へとつなげて活躍。

丸山　海山の非常に魅力的な素材が、高速を通してもっと密接し、もっと広がるような関係にしなければというとですね。高速開通に向けて準備しておくべき課題は何でしょう。観光協会の立場から岩崎さんにおうかがいします。

岩崎（裕祐・観光分科会）　2008年に佐伯IC（ハイ通）今年3月に（宮崎県内）北浦～須美江、目向～都農が開通し宮崎県内全線開通しました。乗降台数を比較すると一日当たり2千台弱増えているけど、佐伯市内の道の駅3駅で売り上げが3千万円ほど減っている。台数が増えているのに売り上げ減っているのは、開通に向けて蒲江の隣出が増えて蒲江の道の駅にくさん来ているからだとされています。延岡南ICまでの67.2%の無料区間をしっかり意識して、いろんな地域に散らばるコンテンツを「田舎オールスターズ」として出すことが佐伯観光を支える礎になると感じています。

外部の人加えた企業体

丸山　高速を生かしてより新しいものをつくるために必要なことは何でしょう。分科会の議論も踏まえて、産創交流分科会アドバイザーの二宮さんいかがですか。

二宮　今日一日で佐伯の方のバイタリティーを感じました。皆さん本当に地元愛を持っている。一つ思ったのは、素材、加工技術、観光全てを合わせて総合的にプロデュースする事業や会社を、地元のだけではなく外部の人を交えて組みなおすというようなことです。この“企業体”の活動がまだ外に広がっていけば人口減少の歯止めにもつながる。東九州道開通をプラスに捉えていく意識が必要だと思いました。

産創交流／アドバイザー
Go Ninomiya
二宮剛 さん
大分市在住。28歳。大分ベンチャーキャピタル投資事業部マネージャー。鹿児島大学卒業後、2009年に大分銀行入行。今年4月から現職。

地元の人は「居たい」街

丸山　プラスに考えていくことは絶対に必要です。高速開通が目前に迫っており、観光の方は今までやってきたことが試されるし正念場と認識しており、同時に未来に向かって仕込みをしていくことも考えていると思います。山浦先生、講演全体を通してどんな印象を持ちましたか。

山浦　先ほど松久さんから伊勢えびの話があって、たぶん佐伯の伊勢えびはどこにも負けない味があるんでしょう。松久さんは「試されて」と言いましたが、相当な自信を持ってるんじゃないかなと。雪人子寿も高橋さんは地味だと言いましたが、材料自体はここにしかないものではないけれど、その組み合わせや作っている方のいろんなエピソードを売りにしてこれだけ定着してるんだろうと思うんです。その意味で伊勢えびはナンバーワンで雪人子寿しはオンリーワンで他には出てこないでしょう。佐伯は大きなってナンバーワンとオンリーワンがあり、他にもいろいろあると思います。そういう魅力を持った地域。その佐伯で何か統一的に考えられないかなと思ってたんですけれど、一つは、合併して九州一番広いとか、九つの市町村が一緒になって連携が難しいという話があったのですが、それをマイナスに考えるのではなくプラスに考えなければならない。ひらがなの「さいき」に「最機」という漢字を当てれば、最もチャンスがある、広いからこそまだまだいろんな知恵入れが市内にいるし、いろんなヒントがあり、ネットワークを市内でつくっていく余地があると考えることができるんじゃないかと。もう一つ、観光分科会のキーワードに「街・浦・里・人」が挙がっていましたが、それに何か付けるとすれば「おりたくい」。高速道の無料区間があって、素通りされるのはもったいないので、佐伯で降りてもらう「降りたい」街・浦・里・人」。また大分の方が「おりたい」は、そこに居たいという意味もあります。先ほどファンをつなぐという話もありましたが、外のファンにはぜひ降りていただきたいし、地元のファンにはぜひ「居りたい」と思ってもらえるような活動をどんどん広げて、高速開通を契機に佐伯市が盛り上がっていくといいんじゃないかと思っています。

総合アドバイザー
Yoichi Yamaura
山浦陽一 さん
東京都出身。35歳。大分大学経済学部准教授。2003年から現職。大分県と農村地域の連携、研究・教育・地域連携の相乗効果などを研究している。

新しい流れ生み出して

丸山　降りたい、居たいですね。そういうファンをつなぐという意味を込めた素晴らしいキーワードじゃないかと思います。せっかく高速が宮崎県と完全につながるのに、素通りされては私たちもったいないし、利用する人ももったいない。もったいないことはさせないように戦略をめぐらせていかなければならないでしょう。そしてそれがやはり、佐伯市を未来に向かって元気にしていく鍵になるのだと考えます。九州一という広さがあります。広いから逆のことは知らないと言うのではなく、広さを逆に利用していく。今まで海は海、山は山という部分もあったかと思いますが、広いことを生かして広域的なネットワークを構築し、海、山、街、人が連携した新しい流れを生み出してほしいです。プランドをつくり、情報発信し、一人でも多くの佐伯ファンをつくって、高速道から「降りたい」「居たい」ファンをつなぐ佐伯市を築くことを、未来へのメッセージにしていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

これまでのハピカム開催地／平成23年度 宇佐市（10月）津久見市（3月）　平成24年度 九重町（6月）日出町（9月）国東市（12月）臼杵市（3月）　平成25年度 竹田市（6月）日田市（9月）中津市（11月）東京（1月）姫島村（3月）　平成26年度 杵築市（6月）別府市（9月）佐伯市（12月）

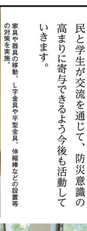
地域の医療現場から学ぶ

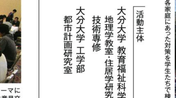
地域医療セミナーin佐伯
平成26年3月11日～14日
活動主体　大分大学医学部附属地域医療学センター　大分県地域医療支援センター

活躍中の患者さんをインタビューする学生。

西嶋佐伯市長を交えた情報交換会で佐伯の魅力やセミナーの感想を述べる学生。

大分大学医学部附属地域医療学センターは、1学年定員の学部定員、地域枠などの奨学金の対象を実施。





各家庭にあった対策を学生たちが検討。

住まいの状況や要望を確認するため、事前に各家庭を訪問。

活動主体
大分大学　教育福祉科学部
地域学教室　住居学研究室
技術専修
大分大学　工学部
都市計画研究室

「佐伯地域の医療を守るには？」をテーマにワールドカフェ形式で医療スタッフと意見交換。

大分大学医学部附属地域医療センターでは、医師を目指す学生が将来、より地域事情を理解のうえ医療貢献できるように、地域に滞在して学ぶ医療セミナーを毎年実施しています。3回目となる今年は佐伯市にて開催。参加した学生17名は、グループディスカッションや市内病院での実習体験を通じて、医療スタッフや患者さんと様々な意見交換を行い、佐伯市の医療事情や課題について考えていきました。また、佐伯市の歴史や文化を学ぶプログラムも体験しました。大分大学では、地域を広い視野でみつめ医療貢献できる医療人を今後も養成していきます。

地域を学び、地域とつながる大分大学

防災・減災ボランティアの取り組み

佐伯市編

11月9日、大分大学の学生と教員ら40名が、佐伯市鶴見吹浦地区の高齢者世帯をめぐり、災害時の家具転倒防止のための金具設置や住宅用火災報知器の設置を行いました。平成25年度から実施している防災に関する避難訓練調査やアンケート活動を通じて、同地区の高齢者が地震対策に困難な現状がわかったため、それを支援するボランティア活動が実現しました。大分大学では、地域住民と学生が交流を通じて、防災意識の高まりに寄与できるよう今後も活動していきます。

人を結び未来へつなぐ
国立大学法人 大分大学
OITA UNIVERSITY

教育福祉科学部
キーワードは、「教育と福祉の融合」。常に社会の要請に応え続けます。
●学校教育課程
●情報社会文化課程
●人間福祉科学課程

経済学部
90余年の伝統に支えられて学ぶ「理論と実践」。経済社会のグローバル化に対応し、地域社会を担える人材を育成します。
●経済学科
●経営システム学科
●地域システム学科

医学部
全人的な医療を行うための総合的な学力を身につけた、人の心を診るための医療人を養成します。
●医学科
●看護学科

工学部
世界をリードする研究、そして地域の人々が生活しやすい“まちづくり”を研究します。
●機械・エネルギーシステム工学科
●電気電子工学科
●知能情報システム工学科
●応用化学科
●福祉環境工学科（建築コース・メカトロニクスコース）

大学院
より高度で実践的な専門能力を身につけた人材を育成します。
●教育学研究科
●経済学研究科
●医学系研究科
●工学研究科
●福祉社会科学研究科

学術情報拠点（図書館）

BUNDAI　□旦野原キャンパス／教育福祉科学部・経済学部・工学部 〒870-1192 大分市大字旦野原700番地　□挾間キャンパス／医学部 〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地　□王子キャンパス／附属幼稚園・附属小学校・附属中学校・附属特別支援学校 〒870-0819 大分市王子新町1番1号　www.oita-u.ac.jp

佐伯 かまえ元猿湾（もと さる）冬の花火大会
とき 平成27年1月17日(土) 10:00～19:30
場所 大分県マリンカルチャーセンター・元猿湾
花火大会 18:30～打ち上げ
大盛況！
みんな集まれ
プリ投げ大会 勝って今年の縁起を担ぐ！
キャラクター大集合！ 一緒に写真を撮ってね！
売切れ御免！
1月12日～18日
マリカル朝市 新鮮な魚がいっぱい！
マリカル芸術祭 陶器の器展をマリンホールで開催！
花火大会関連イベント 同時開催 午前10時～
食の祭典
・こまだしうどん ・佐伯ラーメン ・あつぼし ・すりみ 他
・メヒカリ唐揚げ ・海揚げうどん ・延岡茶麺 ・あげみ 他
大分 佐伯市 VS 宮崎 延岡市
その他 楽しいイベント 盛りだくさん！
大分県マリンカルチャーセンター ☎0972-42-1311
大分県佐伯市蒲江大字竹野浦河内1834-2 FAX:0972-42-1531
ホームページはこちら▶http://www.oita-mcc.jp
フェイスブックはこちら▶http://www.facebook.com/maricul.oita

プランその1 大好評！ モイカ宿泊プラン
1泊2食付き（お一人様） 8,800円（税込）
食事のみ（お一人様） 3,900円（税込）
※肉厚で甘いモイカを食べてください
プランその2 マリカルでゆったり 新年会 ～新鮮な魚介を使った～ 海鮮鍋宿泊プラン
なんと!! 海鮮鍋＋宿泊＋朝食 =7,800円（税込）
食事のみ（お一人様） 4,500円（税込）
大勢で集まってわいわい！カラオケで更に盛り上がろう！
写真は4人前
年末年始も休まず営業いたしております。ぜひお越し下さい。

蒲江の地元産品満喫！ マリカル朝市 MARICUL ASAICHI
開 第1日曜日 午前8時30分～午前10時 雨天決行
1月4日 カキ祭り
1月のマリカル朝市はカキ祭り！
◆朝どれ活魚の販売
◆磯ものの販売
◆活きアジの実演販売
◆真牡蠣の殻売り
◆干物・加工品販売
◆汁もの、飯もの販売
◆農産物の販売
活魚 干物 磯物 加工品 農品
交通アクセス
佐伯ICから約40分。
県道37号線【山の道】または国道388号線【海の道】からお越しください。
佐伯市街地 佐伯IC ロッジ・ウエスタンシティ ロッジ・ウエスタンシティ前 217 37 佐伯大橋 山の道 畑野浦 388 388 海の道 蒲江 道の駅かまえ 竹野浦河内 高山トンネル 蒲江
大分県マリンカルチャーセンター